（別紙様式３）

令和５年３月 31 日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　京都市下京区中堂寺命婦町１番地 10
京都産業大学むすびわざ館内（３・４階）
管理機関名　京都府教育委員会
代表者名　教育長　前川　明範

令和４年度ＷＷＬ（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

１　事業の実施期間
令和４年４月１日　～　令和５年３月 31 日

２　事業拠点校名
学校名　京都府立鳥羽高等学校
学校長名　宮島　勇二

３　構想名
未来を創る課題解決先進国の人材育成　～京の智から地球の智へ～

４　構想の概要
歴史と伝統に育まれた「京の智・日本の智」と各国・各地域における「世界の智」を高度で先進的な学びや協働学習により「地球の智」へと高めることにより、設定したグローバルな社会課題「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」に取り組み、Society 5.0 において全国の自治体・高校等が活用できるイノベーティブなグローバル人材を育成する京都モデル「ＡＬネットワーク京都」を研究開発する。この京都モデルを実現するため、京都府独自の３つの京都戦略、大学教育の先取り履修や海外インターンシップ等の「高度で先進的な学びの機会の提供」、ＩＣＴ活用による遠隔教育や京都府ＷＷＬ高校生サミットの開催等の「グローバルかつ多様な協働学習の機会の創出」、オンライン情報共有システム「京都府ＷＷＬプラットフォーム」の活用等の「研究開発内容の共有と継続的な成果普及」を設定し、世界をリードする課題解決先進国となることを目指す。

５　教育課程の特例の活用の有無
普通科における卒業に必要な修得単位数に含めることができる学校設定科目の修得単位数の上限である 20 単位を超えて、学校設定教科「グローバル」に学校設定科目「英語理解」（２年次・３単位、３年次・４単位）を設置する。

６　管理機関の取組・支援実績

（１）実施日程

業務項目	実施期間（　令和４年４月１日　～　令和５年３月 31 日）											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
①ＡＬネットワーク京都運営指導委員会				―								―
②京都府ＷＷＬプラットフォームの運営	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
③運営指導委員会						―					―	
④検証組織委員会					―					―		
⑤京都府ＷＷＬ教員研修				―								
⑥カリキュラム・アドバイザー配置	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑦オンライン・キャリアセミナー				―								
⑦京都府ＷＷＬ高校生サミット							―					
⑧グローバルネットワーク京都交流会											―	
⑨京都府ＷＷＬフォーラム									―			

（２）実績の説明

【実施体制の整備】

a.　管理機関の下、拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組む体制の整備状況

ア　ＡＬネットワーク京都運営委員会の設置

管理機関の長を委員長とし、拠点校及び共同実施校の校長、事業協働機関である京都大学大学院の神吉紀世子教授と福知山公立大学の杉岡秀紀准教授からなる委員会を設置し、関係校及び関係機関が連携して組織的に事業を推進する体制を整備した。

イ　拠点校 WWL 会議の実施

拠点校において、拠点校 WWL 担当者を中心とした WWL 会議を週１回開催し、「総合的な探究の時間」をはじめカリキュラム研究開発について進捗状況を共有しながら組織的に事業を進めた。

ウ　共同実施校の体制

共同実施校において、管理機関及び拠点校と円滑に連携して事業を進めるために、「みらい探究部」に WWL 事業担当者を配置した。

エ　カリキュラム・アドバイザーの拠点校配置

令和２年度から継続してカリキュラム・アドバイザーを配置した。※詳細については、【AL ネットワークの形成】の d に記載のとおり。

オ　国の他事業を実施している連携校の状況

府立嵯峨野高校、府立洛北高校、府立桃山高校がスーパーサイエンスハイスクール支援事業の指定を受けており、各校でＷＷＬ事業担当者を配置し、管理機関と円滑に連携した。

b.　管理機関の下、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況

ア　京都府ＷＷＬプラットフォームの運用

管理機関はオンライン情報共有システムである京都府ＷＷＬプラットフォームを活用し、管理機関、拠点校及び共同実施校の取組に係る情報の共有を行った。また拠点校の「総合的な探究の時間」に係る実践報告書を掲載し、取組の成果普及に努めた。

イ　グローバルネットワーク京都校との連携

管理機関担当者は、拠点校を含む府立高校 10 校（鳥羽高校、山城高校、洛西高校、西乙訓高校、西城陽高校、城南菱創高校、菟道高校、東宇治高校、園部高校、峰山高校）からな

るグローバルネットワーク京都校の連絡協議会（６月）に出席し、ＷＷＬ事業に係る情報共有と管理機関の取組への参加を依頼した。

ウ　その他

・年度当初に国内連携校へWWＬ事業に係る年間計画を書面で通知した。また、府外連携校の担当者とメールで情報共有を行った。
・府外連携校を所管する教育委員会の担当者とメールで情報共有を行った。
・海外連携校と管理機関及び拠点校の担当者がメールで連携の調整等を行った。

c.　管理機関の長、拠点校等の校長が果たした役割について

ア　管理機関の長の主な役割

・ＡＬネットワーク京都を形成し、事業運営と研究開発を実施
・運営指導委員会の設置及び運営
・検証組織委員会の設置と本府WWＬ事業の成果分析
・大学教育の先取り履修等の高度で先進的な学びに係る大学との調整と取組の実施
・教員研修や生徒対象セミナーの計画及び運営

イ　拠点校等の校長の主な役割

・事業の推進のための校内体制の整備
・生徒への高度で先進的な学びへの参加促進
・海外連携校とのプログラム実施
・事業協働機関への連携協力に係る依頼

d.　運営指導委員会及び検証組織委員会の開催実績及び検証資料の収集の状況

d-1.　運営指導委員会

＜運営指導委員＞

区分	氏名	所属・役職
委員長	三谷　宏治	ＫＩＴ虎ノ門大学院・教授
委員	内藤　義弘	京都府国際センター・常務理事
委員	北尾　哲郎	日東薬品工業株式会社・取締役会長
委員	スティーブン・ハーダー	京都ノートルダム女子大学・教授

運営指導委員会には、高校教育課長、拠点校及び共同実施校の各校長も出席した。

＜開催実績＞

【第１回運営指導委員会】

日時：令和４年９月 26 日（月）
場所：京都府立鳥羽高等学校
内容：（１）令和４年度事業実施計画及び上半期の実施状況及び生徒発表等
（２）令和４年度第１回アンケート調査結果について
（３）意見交換・研究協議

【第２回運営指導委員会】

日時：令和５年２月 27 日（月）
方法：京都府立鳥羽高等学校
内容：（１）令和４年度実施内容及び成果と課題について及び生徒発表等
（２）検証組織委員会からの報告
（３）研究開発期間終了後の取組について
（４）意見交換・研究協議

d-2.　検証組織委員会

＜検証組織委員＞

区分	氏名	所属・役職
委員	小野　善生	滋賀大学・教授
委員	福田　敏信	KPMG／あずさ監査法人

＜開催実績＞
【第１回検証組織委員会】
日時：令和４年８月 22 日（月）
場所：京都府教育庁
内容：（１）今年度の事業実施計画概要について
（２）今年度の検証組織委員会に係るスケジュールについて
（３）令和４年度第１回アンケート調査結果の分析について
（４）卒業生追跡調査について
【第２回検証組織委員会】
日時：令和５年１月 16 日（月）
場所：京都府教育庁
内容：（１）拠点校担当者へのヒアリング調査
（２）ヒアリング調査を踏まえたアンケート調査の結果分析
（３）ＷＷＬ事業３年間の成果分析・まとめ
＜検証資料＞
令和２年度から以下の内容でアンケート調査を実施し、データ収集・分析を行った。

検証項目	対象	資料
1. ６つの資質・能力の育成 2. マインドセット	拠点校全学年の生徒	生徒向けアンケート
3. 探究的な資質・能力について	拠点校・共同実施校 全学年の生徒	生徒向けアンケート
4. 拠点校におけるカリキュラム 研究開発・実施の進捗状況	拠点校の教員	教職員向けアンケート 担当者へのヒアリング調査

また成果分析の参考資料として、以下の取組についてもアンケート調査等を実施した。
（１）海外オンライン・インターンシップ（上海及び台湾）
（２）オンライン・キャリアセミナー
（３）拠点校と海外連携校とのオンライン交流会（フランス・中国・韓国）
（４）京都府ＷＷＬ高校生サミット
（５）京都府ＷＷＬ教員研修
（６）府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」
（７）「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム（先取り履修）」

e. 管理機関が、拠点校等の卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向けた計画
卒業生追跡調査の方法等について、拠点校が以下のとおり実施予定である。

対 象 者：拠点校令和２年度入学生のうち協力者
調査方法：オンラインによる自由記述形式のアンケート調査
質問内容：（１）ＷＷＬ事業と卒業後の進路選択について
（２）ＷＷＬ事業を通した学びが卒業後にどのように活きているかについて
（３）卒業後の海外指向性の変化について
調査時期：卒業前・卒業後３年目・卒業後５年目の合計３回

f. アジア高校生架け橋プロジェクト等による留学生等の日本での学習や生活を支援する体制
アジア高校生架け橋プロジェクトについては、共同実施校の福知山高校がタイの留学生１名を受け入れた。本ＷＷＬ事業に携わっている英語科教員が受入担当者となり、言語面で留学生を支援できる体制を整えるとともに、担当者とクラス担任が日本語学習の支援を行った。留学生は日本語初級者であることから、科目によっては内容理解が難しい授業もあったが、「みらい考Ⅰ（総合的な探究の時間）」に参加しグループで探究活動に取り組む体制を整えた。

g. 事業拠点校での取組について、本事業による取組が学校全体の授業改善や関係機関の教職員や生徒の意識改革を促した状況

拠点校の教職員対象のアンケート調査を令和２年度から３年間実施し、本事業による取組が学校全体の授業改善や拠点校の教職員の意識改革を促したかについて調査した。また教職員アンケート結果を踏まえて、検証組織委員会において拠点校担当者へのヒアリング調査を行い、アンケート結果の要因と拠点校の教員の意識変容についてさらに深い分析を試みた。なお、生徒の意識改革の状況については、「８　目標の進捗状況，成果，評価」に記載する。

ア　拠点校教職員アンケート調査に係る主な肯定的回答率の変化

・「多様な学校設定科目は、高度で先進的な学びの機会を、生徒に提供できている。」
令和２年度 12 月 83.3% →　令和４年度 12 月 89.7%（＋6.4%）

・「伝統文化の神髄に触れる機会は、グローバル社会を俯瞰する力の育成に有効である。」
令和２年度 12 月 84.8% →　令和４年度 12 月 92.6%（＋7.8%）

・「ＷＷＬ事業による取組が、学校全体の授業改善につながっている。」
令和２年度 12 月 74.2% →　令和４年度 12 月 85.3%（＋11.1%）

イ　拠点校担当者のヒアリング調査から分析できる教員の変容

・「総合的な探究の時間」において指導方法等の改善に継続して取り組んだ結果、教員の教科指導にも変化が生じている。具体的には、発問をする際には、探究活動に活きる発問を考え、教科等横断的な指導を意識し始めている。

・新たな教科・科目の研究開発について、担当教員が科目を通して育成する資質・能力を明確にして指導するよう、校内で実践報告書の作成に取り組んだ。これにより、本府ＷＷＬ事業で育成する６つの資質・能力について、担当教員が各科目でどのように指導し育成するのかを常に意識し教科指導を行った。その結果、授業が主体的かつ協働的な学びとなり、授業改善が進んでいる。

ウ　関係機関の教職員の意識改革を促した取組

・府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」について、以下のとおり府内関係校の教員が参観できるようにし、大学教員による指導方法等を学ぶ機会を提供できた。

日　時：令和４年４月から９月までの計６回
内　容：社会課題の解決に必要なリサーチスキル等の講義を参観し、各校の探究活動の指導に活かす。
参観者：鳥羽高校・福知山高校・嵯峨野高校・峰山高校の教員

・京都府ＷＷＬ教員研修として、拠点校の探究活動における実践報告並びに大阪大学教員による講義及びワークショップを開催し、拠点校の成果を普及するとともに、探究活動におけるレポート作成能力等の育成について、関係校の教職員の意識改革を促すことができた。なお、ＡＬネットワーク京都以外の府立高校教員の参加もあった。

日　時：令和４年７月 28 日（金）午後１時 30 分から３時 30 分まで
講　師：堀一成　教授（大阪大学全学教育推進機構）
テーマ：「探究活動におけるアカデミック・ライティングの指導 –鳥羽高等学校の実践を例に」
参加校：鳥羽高校、福知山高校、洛北高校、桃山高校、清明高校、北稜高校、朱雀高校須知高校、秋田県立秋田南高校、沖縄県立那覇国際高校（合計 10 校、20 名）

h. アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生受け入れ

共同実施校である福知山高校がタイからの留学生を１名受け入れた。（再掲）

【財政等支援】

a. 自己負担額として、計画段階よりさらに計上したもの

該当なし。

b. 人的又は財政的な支援、研修やセミナー等の実施状況

ア　グローバル人材の育成に係る支援

・拠点校における英語指導助手の１名増員

・感染症拡大等の影響により英語指導助手の配置が遅れた学校への非常勤ＡＥＴの配置

・拠点校の「総合的な探究の時間」におけるティーチング・アシスタントの財政的支援

・京都府WWＬ高校生サミットにおける、京都府名誉友好大使等の派遣に係る財政的支援

イ　留学支援事業の充実

・将来的に海外留学を志す生徒を支援するために、国内で対面とオンラインによるハイブリッド型英語研修を実施

ウ　ＩＣＴ利活用の推進に係る支援

・各府立高校におけるＩＣＴの利活用を推進する教員に係る研修を実施

c. 管理機関が、国の委託が終了した後も事業を継続的に実施するために計画したこと

ＡＬネットワーク京都事業として、「スマートＡＰ」等の取組について予算を計上した。

【ＡＬネットワークの形成】

a. ＡＬネットワーク運営組織の実績

年度計画の策定、事業の運営、達成状況の評価・見直し、指定後の取組を協議するために、ＡＬネットワーク京都運営委員会を年２回（７月・３月）開催した。

b. 関係機関の間で十分な情報共有体制を整備し、有効な事業実施を実現したこと

ア　情報共有体制の整備

・京都府WWＬプラットフォームの活用

・府立高校グローバルネットワーク京都校連絡協議会の開催

・京都府WWＬフォーラムの開催

イ　有効な事業実施の実現について

事業協働機関である総合地球環境学研究所が京都府及び京都市と実施している「高校生による気候変動学習プログラム」に、本府WWＬ関係校が昨年度に引き続き参加した。参加校は、福知山高校、嵯峨野高校、桃山高校及び南陽高校で、参加生徒は気候変動に関する専門家による勉強会を通じて気候変動について学んだ。また令和４年 11 月 14 日に開催された京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウムにおいて、「第 13 回ＫＹＯＴＯ地球環境の殿堂」の殿堂入り者とのトークセッションに、京都府の代表生徒として関係校から４名の生徒が登壇した。

c. 卒業生の国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進に向けた取組

ア　オンライン・キャリアセミナー

将来、グローバルに活躍することを目指す府内のWWＬ関係校の希望生徒を対象に、以下のとおり、グローバル人材に求められる資質・能力について学び、高校卒業後のグローバル・キャリアについて考える機会を設定した。

題　目：「グローバル・キャリアを考える –海外留学の現状とこれから–」
実施日：令和４年７月 23 日（土）午後１時 30 分から３時 30 分まで
方　法：オンライン開催
内　容：第一部「現地学生による海外大学紹介」
第二部「海外大学在学中の日本人学生による留学体験談」
第三部「海外大学進学の魅力と進学対策について」
第四部「海外企業勤務の日本人によるキャリアデザインに関する講話」
参加者：18 名（鳥羽高校、山城高校、洛北高校、嵯峨野高校、桃山高校、洛西高校、東宇治高校、南陽高校）

イ　ハイブリッド型英語研修（国内）

新型コロナウイルス感染症の影響により、オーストラリア中期留学については中止したが、その代替として国内で３泊４日のハイブリッド型英語研修を年２回実施した。国内の留学生と対面でプロジェクトに取り組みながら、シンガポール等の大学生とオンラインで交流するとともに、イギリスの大学とも接続して日本人学生から留学の現状についての説明を受けるなど、参加生徒の海外留学への意識を高める内容であった。

ウ　京都府ＷＷＬ高校生サミットに向けたカナダ・コキットラム市の高校生との交流会

府外連携校を含む生徒が、カナダの高校生と本サミットで議論するテーマについて意見交流し、参加生徒の海外志向の向上に効果があった。

エ　その他、海外志向性を高めたと考えられる取組

・拠点校が海外連携校（フランス・中国・韓国）と実施したオンライン交流
・海外オンライン・インターンシップ（中国・台湾）における現地社員との交流
・京都府ＷＷＬ高校生サミットにおけるオーストラリアの高校生や留学生ファシリテーター（香港・中国・ブータン・カナダ・オーストラリア・ミャンマー）との交流

d. ＡＬネットワーク運営組織に専任者からなる事務局を設置した状況及び本事業のカリキュラムを開発する人材の配置状況

カリキュラムを研究開発するにあたり、斉藤和彦カリキュラム・アドバイザーを拠点校に配置した。カリキュラム・アドバイザーの主な役割は以下のとおりである。

ア　拠点校の「総合的な探究の時間」に係る指導・助言
イ　共同実施校の「総合的な探究の時間」の成果発表会への参加及び指導・助言
ウ　府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」に係る講義内容の調整及び運営面での助言
エ　「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」に係る京都府立大学及び福知山公立大学との協議への参加及び課題等の分析
オ　カリキュラム開発の課題の整理のため、管理機関の担当指導主事と定期的な打ち合わせ

e. テーマと関連した高校生国際会議等の開催準備状況

e-1. 京都府ＷＷＬ高校生サミット

「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」をテーマに、ＮＴＴ西日本京都支店と協働し、以下のとおり、令和４年度京都府ＷＷＬ高校生サミットをオンラインで開催した。参加者は、ＳＤＧｓの視点を踏まえたトピックの中から１つ選択し、事前にテーマに関して調査を行い、持続的な未来社会の創出における課題とその解決策を議論し発表した。

日　時：令和４年 10 月 29 日（土）午前 10 時から午後４時 30 分まで
内　容：(1)トピック及び使用言語（日本語・英語）ごとに４人程度のグループを編成
(2)トピックに関して事前に各地域の課題とその解決方法を調査しグループで共有
(3)共有した解決策の中から、どの解決策が最も普遍的かつ先進的であるかを議論
(4)言語ごとに発表会を実施し、他のグループに議論した結果を発表
(5)英語部門については、留学生がファシリテーターとして参加
方　法：オンライン開催（参加生徒は主に在籍校からオンラインで参加）
参加校：鳥羽高校、福知山高校、洛北高校、嵯峨野高校、洛西高校、南陽高校、峰山高校、秋田県立秋田南高校、学校法人九里学園高校、沖縄県立那覇国際高校、Mansfield State high school（豪州）
参加者：日本語 29 名（７グループ）、英語 24 名（６グループ）
講評者：【英語】スティーブン・ハーダー　教授（京都ノートルダム女子大学）
【日本語】杉岡秀紀　准教授（福知山公立大学）
留学生：６名（京都大学大学院、関西大学、京都外国語大学、京都教育大学）
トピック：下記の領域に関して、ＳＤＧｓを踏まえた課題を設定
Ⅰ「文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出」
Ⅱ「科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出」

Ⅲ「多文化共生による平和で安心な未来社会の創出」
Ⅳ“Creating a vibrant society in the future, making strategic use of cultural heritage”
Ⅴ“Creating a secure and peaceful society where people from various backgrounds and origins can live together in the future”

＜成果＞

ア　９割以上の参加者が「本サミットは自分にとって意義のあるものであった。」と回答しており、今後も学校の枠を超えた交流への参加を希望している。

イ　議論の観点（「普遍性」と「革新性」）を示すことで、議論の到達点が明確になり、オーストラリアの高校生との英語ディスカッションが円滑に行われた。

ウ　英語部門においてオーストラリアの高校生が参加したことにより、よりグローバルな視点で社会課題を議論することができた。

エ　府外連携校からの継続参加により、日本語部門のディスカッションにおいても、参加生徒が身近な地域課題を全国的な課題と関連させて議論することができた。

e-2. グローバルネットワーク京都交流会

拠点校を含むグローバルネットワーク京都校 10 校が集まり、探究活動の成果について以下のとおり交流会を実施した。

日　時：令和５年２月４日（土）
場　所：京都工芸繊維大学
テーマ：「持続可能な国際社会への展望」
参加校：鳥羽高校、山城高校、洛西高校、西乙訓高校、城南菱創高校、菟道高校、東宇治高校、西城陽高校、園部高校、峰山高校
内　容：(1)論文コンテスト（審査は事前に行い、当日は表彰式を実施）
(2)英語プレゼンテーションコンテスト（全 10 校が発表）
(3)日本語ポスターセッション（計 18 グループが発表）

f. 社会に開かれたフォーラムや成果報告会などの実施

以下のとおり、京都府ＷＷＬフォーラムを開催し、カリキュラム研究開発の成果を報告し、本府ＷＷＬ事業の学術顧問よる未来社会に向けた人材育成について学ぶ機会を設定した。

日　時：令和４年 12 月 23 日（金）午後１時 30 分から３時 30 分まで
方　法：オンライン開催
内　容：(1)管理機関によるＡＬネットワーク京都の取組実績及び成果報告
(2)拠点校によるカリキュラム研究開発の成果報告及び生徒発表
(3)基調講演　阿部健一　教授（総合地球環境学研究所）
「未来を創る言葉と力：関係価値」
参加者：22 名（本府ＷＷＬ事業運営委員、本府ＷＷＬ事業運営指導委員、府内外連携校関係者、他府県ＷＷＬ拠点校等、他府県教育委員会、大学関係者）

なお、「６　管理機関の取組・支援実績　（２）実績の説明」の g-ウに記載のとおり、京都府ＷＷＬ教員研修も実施し、拠点校の探究活動の成果普及に努めた。

g.　構想目的の達成に資する取組の計画と、効果的かつ円滑な運営のための情報収集・提供の実績

ア　「ＷＷＬ（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」令和４年度連絡協議会への出席

イ　東京都教育委員会実施「Diverse Link Tokyo Edu」成果報告会への参加

ウ　大学コンソーシアム京都主催「第 20 回高大連携教育フォーラム」（令和４年 12 月３日）において、本府ＷＷＬ事業に係る高大連携の取組を報告

エ　京都府ＷＷＬフォーラムに参加した他県ＷＷＬ拠点校への情報提供

h. ＡＬネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書等
「京都大学と京都府教育委員会との包括連携に関する協定」（平成 26 年）
「京都府立大学と京都府教育委員会との連携協力に関する協定書」（平成 29 年）
「京都府と福知山公立大学との連携・協力に関する包括協定書」（平成 30 年）
「京都府立高等学校生徒への大学教育の先取り履修プログラムの実施に係る覚書」（令和４年）
「日本国京都府教育委員会とオーストラリア国クイーンズランド州教育省との間の協力協定」（令和４年）

７　研究開発の実績
（１）実施日程

業務項目	実施期間（令和４年４月１日　～　令和５年３月 31 日）											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
①設定したテーマ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
②「イノベーション探究Ⅰ」に係る大学・企業等との協働		―	―				―		―	―	―	
③「イノベーション探究Ⅱ」に係る大学・企業等との協働		―	―	―		―		―				
④グローバル･キャリアパス・プログラム								―	―	―	―	
⑤京都府立大学との連携				―		―					―	
⑥新たな教科・科目の設定	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑦海外インターンシップ			工場見学			海外渡航制限のためオンライン実施に変更						
⑧カナダの高校生との交流会（サミット事前学習）							―					
⑨大学教育の先取り履修「スマートＡＰ」の実施	計７回の講義と京都府ＷＷＬ高校生サミットを実施									受講証明書発行		
⑩大学教育の先取り履修「きょうとＡＰＰ」		前期科目受講						後期科目受講				

（２）実績の説明
a.　設定したテーマについて
　グローバルな社会課題のテーマとして、指定初年度から継続して「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」を設定し、ＳＤＧｓの目標を踏まえた、３つの領域について、拠点校の「総合的な探究の時間」の課題研究や本府ＷＷＬ高校生サミット等に取り組んだ。

領域Ⅰ	文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出
領域Ⅱ	科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出
領域Ⅲ	多文化共生による平和で安心な未来社会の創出

b.　関係機関による先進的なカリキュラムの研究開発
b-1. 拠点校における大学・企業等との協働
ア　第１学年グローバル科「イノベーション探究Ⅰ」について
○令和４年５月 12 日（木）神吉紀世子　教授（京都大学大学院）によるワークショップ
テーマ：「まちづくり研究について～京の智の再発見～」
○令和４年６月 24 日（金）乾明紀　准教授（京都橘大学）によるワークショップ
テーマ：「リサーチクエスチョンについて」
○令和４年 10 月 20 日（木）杉岡秀紀　准教授（福知山公立大学）によるワークショップ
テーマ：「大学の研究と社会貢献-私の探究（研究）紹介-」（オンライン実施）

○令和４年 12 月 23 日（金）企業訪問
訪問先：岩本印刷株式会社
内　容：若者向けの和菓子商品のパッケージを開発するために、パッケージ印刷工場の見学とインタビュー調査を実施（参加生徒３名）
○令和４年 12 月 26 日（月）企業訪問
訪問先：株式会社鶴屋長生
内　容：若者に和菓子の魅力を伝えるため、和菓子作りの工夫やマーケティングについてインタビュー調査を実施（参加生徒２名）
○令和５年１月 15 日（日）企業訪問
訪問先：株式会社渡月橋
内　容：嵐山の新しいお土産を開発するため、コロナ禍の外国人観光客の動向や商品流通についてインタビュー調査を実施（参加生徒３名）
○令和５年２月４日（土）課題研究発表会
助言者：髙田光雄　副学長（京都美術工芸大学）、吉田大作　准教授（京都芸術大学）、小田浩子　代表取締役（有限会社遠山）、西山一諸　様（一般社団法人京都中小企業家同友会）、卒業生６名
○上記の他、卒業生がＴＡとして複数回にわたり探究活動に参加し、助言を行った。

イ　第２学年グローバル科「イノベーション探究Ⅱ」について
○令和４年５月 21 日（土）乾明紀　准教授（京都橘大学）によるワークショップ
テーマ：「チーム探究を充実させるために」
○令和４年６月 25 日（土）中間報告会
助言者：堀一成　教授（大阪大学）、坂尻彰宏　准教授（大阪大学）、大阪大学ＴＡ４名
○令和４年７月９日（土）堀一成氏　教授（大阪大学）及び柿沢寿信　准教授（大阪大学）による講義・ワークショップ
テーマ：「よい課題研究とはどのようなものか？」
○令和４年７月 11 日（月）経営者インタビュー
内　容：経営者と高校生が共に、ウェルビーイングな生き方・働き方について考える取組として、アートム株式会社代表取締役社長とオンラインで接続し、ＳＤＧｓの 18 番目のゴールを設定することを目標に、企業理念や職業観についてインタビュー調査を実施（参加生徒８名）
○令和４年９月 10 日（土）「大阪大学アカデミック・ライティング講座」
会場：大阪大学豊中キャンパス
講師：堀一成　教授（大阪大学）、坂尻彰宏　准教授（大阪大学）、柿沢寿信　准教授（大阪大学）、大阪大学ＴＡ４名
○令和４年 11 月５日（土）課題研究中間発表会
助言者：髙田光雄　副学長（京都工芸美術大学）、堀一成　教授（大阪大学）、坂尻彰宏　准教授（大阪大学）、柿沢寿信　准教授（大阪大学）、大阪大学ＴＡ８名
○上記の他、卒業生がＴＡとして複数回にわたり探究活動に参加し、助言を行った。

ウ　第３学年グローバル科「イノベーション探究Ⅲ」について
○令和４年７月 15 日（金）英語プレゼンテーション
助言者：京都府名誉友好大使 15 名、京都府立高校の英語指導助手５名
内　容：２年次に取り組んだ課題研究について、留学生等に英語で成果を発表し、研究したテーマについて意見交流会を実施した。

エ　「グローバル・キャリアパス・プログラム」について
拠点校グローバル科の専門科目において、以下のとおり、企業等のグローバルな視座と知見に触れることにより、グローバル人材として求められる幅広い教養と深い専門性を身に付けることを目標に実施した。

○令和４年 11 月７日（月）京都青果合同株式会社によるワークショップ
対象科目：第１学年対象「ソーシャル・インテリジェンス」
内　　容：「市場の役割」や「流通業界のマーケティング」について
○令和４年 12 年８日（木）株式会社松榮堂によるワークショップ
対象科目：第２学年対象「京都古典・歴史学」
内　　容：「個人の日常生活と感性の在り方と『香り』や『香』との密接な関係」、「現在の『香』に求められるもの」等
○令和５年１月 28 日（土）株式会社岡墨光堂によるワークショップ
対象学年：第２学年選択科目「地域研究」・「京都の風土・世界の風土」
内　　容：「文化財修理の伝統技術」及び「昨今の文化財に係る諸問題等」
○令和５年２月３日（金）株式会社片岡製作所によるワークショップ
対象科目：第２学年グローバル科　物理選択者「STEAM 物理」
テーマ：「高校の学びとものづくり技術」

オ　普通科リベラルアーツコース「総合的な探究の時間」について
○令和４年７月 12 日（火）京都府立大学教員による特別講義
内容：京都府立大学教員による、専門分野を例に研究の作法や研究の流れについての御講演（120 分）を、普通科リベラルアーツコース 128 名を対象に実施した。
講師：菱田哲郎　教授（文学部）、山川肇　教授（生命環境科学研究科）
○令和４年９月 27 日（火）中間報告会
助言者：菱田哲郎　教授（文学部）、山川肇　教授（生命環境科学研究科）、京都府立大学ＴＡ３名
○令和５年２月４日（土）成果報告会
助言者：菱田哲郎　教授（文学部）、窪田好男　教授（公共政策学部）、山川肇　教授（生命環境科学研究科）、池田葉月　講師（京の防災防疫安全安心研究センター）、京都府立大学ＴＡ５名

カ　運営指導委員である三谷宏治　教授（ＫＩＴ（金沢工業大学）虎ノ門大学院）による特別講義について
令和４年９月 26 日（月）に第１学年の生徒には「発想力の鍛え方」、第２学年の生徒には「決める力の鍛え方」についての講義・ワークショップを実施した。

b-2. 共同実施校における大学等との協働
ア　令和４年５月６日（金）杉岡秀紀　准教授（福知山公立大学）による講義
対象：文理科学科第１学年
内容：「探究活動と問いの立て方」
イ　令和４年７月 26 日（火）金剛能楽堂訪問
対象：７名（海外オンライン・インターンシップ参加者）
内容：金剛龍謹　本府ＷＷＬ事業学術顧問による能楽についての講話と実演を拝聴・拝見し、伝統文化の神髄について学びを深めた。
ウ　令和４年９月 21 日（水）国際理解プログラム「JICA 国際協力出前講座」
内容：セネガルの小学校で青年海外協力隊として勤めておられた方による、セネガルの小学校の様子、国際協力の必要性、求められる支援の内容についての講演を実施した。
エ　令和４年 12 月７日（水）文理科学科第 15 回「みらい学Ⅱ」研究発表会
対象：文理科学科第２学年
助言者：杉岡秀紀　准教授（福知山公立大学）
オ　令和５年２月 24 日（金）みらい学Ⅰ「ＳＤＧｓ×地域課題研究」研究交流会
助言者：杉岡秀紀　准教授（福知山公立大学）、斉藤和彦　カリキュラム・アドバイザー、ＷＷＬ担当指導主事

b-3. 拠点校及び共同実施校における海外大学との連携

令和４年７月 16 日（土）に府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」の一環として、豪州クイーンズランド工科大学による“Team Work and Collaboration”の講義を実施した。参加生徒はオンラインで受講し、講義後に英語レポートを作成し、フィードバックを受けた。なお、府内連携校「スマートＡＰ」受講者も本講義を受講した。

c.　新たな教科・科目の設定

c-1. グローバル・シティズンシップⅠ

新学習指導要領より新設された科目「公共」をベースにした学校設定科目として授業を行った。内容は日本国憲法、国内政治・経済分野を重点的に扱い、自分の身のまわりをグローバルな視点で考察する能力の育成に取り組んだ。教科書の知識をもとに現代社会の諸問題について、グループ討議をしながら資料を作成してプレゼンテーションをさせる時間を多く設けた。こうしたアプローチは、教材に対する思考力を高め、理解を深めることに寄与した。

c-2. 京都古典・歴史学

「京都古典・歴史学」は、平安文学等、京都に係る古典文学やこれらに影響を与えた漢文学の読解及び歴史的視点からの考察を行い、京都の伝統・文化や歴史を深く理解することを目標に取り組みを行った。その一環として、３学期に「平安人のいろあそび」と題した特別講義を実施し、平安時代の「国風文化」、特に「襲」について地歴公民科の教員と国語科の教員で文献や資料をもとに講義を行った後、グループごとに「襲」の色合わせを考え発表させ、平安時代の人々の色彩感や自然観の理解につなげることを試みた。

c-3. ソーシャル・インテリジェンス

「イノベーション探究Ⅰ」に関連づけ、ＩＣＴ機器を用いたデータの収集・分析、結果を解釈する能力を向上させる取組を行った。先ず、「情報Ⅰ」の教材を用いて、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度を育成した。また、プログラミング(Python)を、ＷＥＢ上の学習コンテンツを用いて、学習者それぞれのペースで学習した。他に、表計算ソフト、プレゼンテーションソフト等の操作と活用を学習した。これらを活用し、「イノベーション探究Ⅰ」と連動させた分析・発信をすることで情報活用の実践力を習得した。

c-4. 地域研究／京都の風土・世界の風土

学校設定科目「地域研究」は地理Ａの代替科目として昨年度に設置され、また「京都の風土・世界の風土」は世界史Ａの代替として、これまでもグローバル科で実践されてきた科目である。２年生のグローバル科が両科目のいずれかを選択履修している。２学期には防災･減災をテーマとした授業を計画し、具体的な状況を想定して自分ならどのような対応をとるかを、小グループに分かれてゲーム的要素をもたせて討論させ、災害現場における問題点や課題について理解を深めた。

c-5. STEAM 数学ⅠⅡⅢ

今までに学習した内容が、社会でどのように役立っているかについて、実験をとおして体験的に学ぶことで、問題を解決する力や、新規性の高いものを創造できる力の育成に取り組んだ。例えば、数学Ⅰおよび数学Ａでは小型の教育用マイコン micro:bit や iPad を利用して校舎の高さを求めるという課題や、倍数判定法を学んだ後に素数をテーマにしたゲームを通して判定法の有用性に気付く活動を行った。STEAM 数学Ⅲではグラフ描写ソフトを用いて、２次曲線の特徴を発見しその特徴を理解した上で、自ら問題を作成する活動を行った。

c-6. STEAM 芸術ⅠⅡ（STEAM 芸術Ⅱは選択科目）

今年度はⅠのみの開講であったが、STEM を含む他の学問・芸術・文化と Art の関わりについて考察した。音楽では、他の学問・芸術・文化との関連や、生活や社会との関わりに触れつつ、グループ活動や比較聴取などを通して議論を活発化した。また美術では、遠近法を使

った絵画を鑑賞・制作し、光学の観点から光と色彩との関連や顔料と水との分量による表現の違いについて考えた。さらに書道では、タイポグラフィが日本や中国における過去の優れた筆跡を元に創出されたことを例に、書の現代的意義や多方面への応用について考えた。

c-7.STEAM 物理

現象を科学的に吟味、考察する能力を身につけさせることを目標に、学習した内容を踏まえた上で、新たな題材を与え、科学的に吟味、考察するような授業を展開した。円運動には向心力が必要であることを学習する中で、惑星運動に注目させ、向心力としてどのような力がはたらく必要があるかを考察させた。また、回転する表面があらい円板上にある物体の運動という向心力が見つけにくいものを題材に、科学的に吟味し考える機会を設けた。

c-8.STEAM 化学

身の回りの自然現象と関連付けながら、身近に化学を考えるきっかけとなるように授業を展開した。単に新しい語句や公式を暗記して問題を解くだけでなく、実験実習を通して得られた知見を教科等横断的に他教科との関連性も図りながら物事の本質を理解できるように指導した。また、実験実習はコロナ禍でもあり実施回数は少なかったが、マイクロスケールによる４種類の個別実験を行い、生徒に考察させた。

c-9.STEAM 生物

体内の現象や、生物と非生物的環境との関係性を、保健体育や家庭基礎との学習内容と連携することにより、さまざまな視点から学び、その現象のメカニズムや目的に注目させるとともに、系統的に理解できるよう、ペアやグループ内での情報共有、スライドや動画を作成して他者に説明するなど、アウトプットの機会を増やした。また、興味関心のあるものについて、自ら疑問点を主体的に見いだし、教科書や資料から知識を習得し資料を用いてまとめる能力の育成に力を入れた。

c-10.グローバル・コミュニケーションⅠⅡⅢ

「グローバル・コミュニケーションⅠ」では、京都あるいは、日本の若者が直面している問題に関する探究活動を行い、その内容について英語でプレゼンテーションやディスカッションをした。聴衆に分かりやすく内容を伝えるために、発表スライドを工夫して、表現方法に磨きをかけた。「グローバル・コミュニケーションⅡ」では、「イノベーション探究Ⅱ」に関連したテーマについて英語によるディベート活動やライティング活動を行った。ディベートでは主張に対する反論を立案する活動をとおして、批判的思考力を養った。「グローバル・コミュニケーションⅢ」では、「イノベーション探究Ⅲ」と関連づけ、英語論文作成に必要となる表現や構成等、アカデミック・ライティングの学習に取り組ませた。論文の構成を整理して書くことを通して、これまでに養った俯瞰する力、科学的に思考する力、探究の枠組みをデザインする力を発揮する機会を設けた。

c-11.ESA（English for Studying Abroad）Ⅰ

読むこと、聞くこと、話すこと、書くことの総合型タスクを行った。４技能の英語コミュニケーション能力の向上に加え、説得力をもって論理的に自分の意見を発信する力を養った。スピーチ、寸劇（Skit）、助言、ディスカッションを通し、自分の伝えたい内容を自分の言葉でわかりやすく効果的に伝える技術を学んだ。また、論理的思考力、問題解決能力、伝達能力、柔軟性など意見を発信するためには欠かせない力を様々なシチュエーションを提示しながら体験的に学んだ。

c-12.EE（E-English）Ⅰ

ＩＣＴ機器を活用しながら、主体的に学習に取り組む態度を育むことを目標とした活動に取り組んだ。iPad を利用して、各自のペースで、それぞれの能力や課題に合わせた内容のスタディサプリ English に取り組んだ。その内容は毎回レポートにまとめ、各自の学習を振り

返ることが出来た。苦手分野を選んだり、同じ内容を様々な方法で深めたりするなど主体的に取り組む活動が多く、生徒の満足度も高かった。また Skit 作成・発表、英検を基にしたスピーキング活動にも取り組み、学んだ内容を活用したアウトプット活動が出来た。

c-13. 第２外国語ⅠⅡ

中国語、韓国語、フランス語を母語とする教員による授業をとおして、各言語およびその文化について学ばせた。また、フランス・ヌヴェール高校や中国・西安交通大学附属中学の高校生とオンラインで交流会を行うなど、多様な文化的背景を持つ人々と協働する力を育成した。韓国語選択者２年生３名が、第 23 回京都韓国語スピーチ大会に出場し、３名ともに銅賞を獲得した。

c-14. 英語理解

英文構造の理解等を行いながら、筆者の意見・主張を的確に読み取る活動に重点を置いた。その上で、それらについて英語で意見交換を行い、自分の考えを英文にまとめ、グループ内で輪読する等の活動を通して内容理解を深めるようにした。また、「英語表現」・「グローバル・コミュニケーション」で学んだ手法を基に、内容に関連したトピックについてのショートスピーチを行い、英語で意見を伝える力の養成に努めた。これらの活動を通して、生徒が英語を通じてものごとを主体的に考え、自分の意見を形成することに寄与した。

c-15. 文化遺産論α・文化遺産論β

史資料を提示し、歴史的事象について思考・判断し表現するワークを実施するとともに、文献調査を行い、ある文化についてマイテーマを設定して考察する取組を行った。例として、文化遺産論αでは、古代ギリシアの歴史家トゥキディデスの著書『歴史』の一節を取り上げデロス同盟の実態を読解することで、ペルシア戦争後の都市国家アテネの性格を教科書の内容からさらに踏み込んで考察した。史資料の読解や文献調査をとおして歴史を多角的な視点で捉える学びや、教科書で取り扱われている文化がなぜ、今日まで継承され「遺産」となっているのかについて価値を見出す学びに繋がった。

d.　カリキュラムに位置付けられた短期・長期留学や海外研修

新型コロナウイルス感染症拡大により海外渡航が制限されたため、ＩＣＴも活用しながら国内での取組に変更した。各取組の内容は以下のとおりである。

d-1. 拠点校の海外研修

普通科リベラルアーツコース及びグローバル科の生徒については、海外研修旅行を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により行き先を国内に変更して実施した。

d-2. 海外インターンシップ

拠点校と共同実施校を対象に、以下のとおり、株式会社片岡製作所の海外事業所とオンラインで接続し、グローバル企業の事業内容及び海外で活躍するために必要な資質・能力について学ぶため、海外オンライン・インターンシップを以下のとおり２回実施した。

事前学習：令和４年７月 26 日（火）株式会社片岡製作所京都本社レーザ工場訪問
参加生徒 20 名（第１回と第２回の参加者合同で実施）
第　１　回：令和４年９月 28 日（水）上海事業所と接続
参加生徒 10 名
第　２　回：令和４年 12 月 21 日（水）台湾事業所と接続
参加生徒 10 名
内　　容：いずれの回も、各事業所の現地社員の方々から、海外における事業展開及びコロナ禍における現地の状況について説明を受けるとともに、参加生徒と現地社員との質疑応答を実施

＜成果＞

ア　現地社員との対話を通して、参加生徒はグローバルに活躍するための資質・能力について、大きな学びを得た。例えば、多くの参加者が「日本人に足りないのはチャレンジ精神であり、失敗を恐れずに沢山挑戦して学ぶ姿勢を持ちたい。」とアンケートで回答している。

イ　参加生徒の海外志向や外国語学習への意欲に大きな影響を与えた。例えば、「海外より日本は少し遅れている部分が沢山あると知り、私たちはもっと海外に目を向けていくことを進学であっても就職であっても頭に置いて考えるべきだ」、「言語を取得していくことの大切さや、言語を学ぶ上での大切なことが分かり、この経験を今後の第２外国語の学習や、大学受験などに活かしたい。」とアンケートで回答している。

d-3. カナダ・コキットラム市の高校生との交流会

当初計画していた海外インターンシップでは、海外事業所の訪問に加えて、現地の高校や大学生とフィールドワークや協働学習を実施することとしていた。しかし現地訪問が実現しなかったことから、カナダ・コキットラム市の高校生とオンラインによる交流会を実施した。なお、本取組は京都府WWＬ高校生サミットにおける英語ディスカッション参加者に対する事前準備として実施した。

日　時：令和４年 10 月 15 日（土）午前８時 30 分から午後１時まで
方　法：オンライン開催
参加者：13 名（鳥羽高校、福知山高校、洛西高校、南陽高校、峰山高校、秋田南高校）
内　容：①本サミットで議論するトピックを踏まえた、英語ディスカッションの練習
②上記トピックについて、カナダの高校生と少人数のグループで意見交流

＜成果＞

ア　参加者が本サミットと同じトピックで、カナダの高校生と話し合い、日本とは異なる価値観等を学ぶことができた。

イ　本取組について、参加者全員が京都府WWＬ高校生サミットの英語ディスカッションで効果があったと回答している。

ウ　オンライン実施により、府外連携校にもグローバルな学びの機会を提供できた。

d-4. 府立高校海外サテライト校事業

新型コロナウイルス感染症の影響により、府立高校海外サテライト校事業は中止した。その代替として、「６　管理機関の取組・支援実施（２）実績の説明【ＡＬネットワークの形成】」のｃ-イに記載のとおり、国内で３泊４日のハイブリッド型英語研修を年２回実施した。

e.　体系的なカリキュラムの編成にあたり、各教科をバランス良く学ぶ教育課程の編成について

拠点校では単位制による教育課程を導入し、上記「c. 新たな教科・科目の設定」に記載のとおり、課題解決型学習や STEAM 教育を取り入れた、既存教科の枠組みにとらわれない教科・科目を設置している。

f.　工夫された学習活動の実施に向けた計画

管理機関は、遠隔地の高校生同士が時間的・地理的・経済的制約を超えて、高度で先進的な学びにアクセスできる仕組みとして、下記ｇに記載のとおり、昨年度から府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」を開始した。また海外インターンシップ等でＩＣＴを活用した取組を行い、共同実施校だけでなく、連携校にもグローバルな学びの機会を提供できた。

g.　大学教育の先取り履修の実施に向けた計画

g-1. 府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」

令和３年度から継続して、大学との協働による高度で先進的な学びのプログラムを実施した。合計６名の大学教員によるリレー講義やワークシップを受講し、その成果を踏まえて本

府高校生サミットに参加するプログラムである。

＜参加校＞
拠点校、共同実施校、洛北高校、嵯峨野高校、南陽高校、峰山高校（計 27 名）
＜令和４年度プログラム＞　※全て遠隔で実施
第１回　４月 16 日（土）　「課題研究の意義、問いの立て方」
杉岡秀紀　准教授（福知山公立大学）、江上直樹　講師　（大阪大谷大学）
第２回　５月７日（土）　「研究テーマの決定 －ＲＱの設定と仮設の構築-」
乾明紀　准教授　（京都橘大学）
第３回　６月４日（土）　「研究方法について －量的研究と質的研究－ 」
神吉紀世子　教授　（京都大学大学院工学研究科）
第４回　７月 16 日（土）　“Team Work and Collaboration”
Rebecca Axelson 講師（豪州・クイーンズランド工科大学）
第５回　７月 30 日（土）　「論理的・批判的に考える」
柿澤寿信　准教授　（大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構）
第６回　８月 20 日（土）　「チームでプチ課題研究！ －研究計画書を作ろう－ 」
乾明紀　准教授　（京都橘大学）
第７回　９月 17 日（土）　「プレゼンテーションの技法」・まとめ
杉岡秀紀　准教授（福知山公立大学）
第８回　10 月 29 日（土）　京都府ＷＷＬ高校生サミット
＜成果＞
ア　大学の初年次教育との接続を図ることを意識しながら、探究の「作法」を一通り学ぶことができるプログラムを府内の連携校４校にも拡大して実施できた。
イ　在籍校の異なる生徒から成るグループを編成し、全プログラムを通してグループでの議論を実施した。また、グループで１つのプロジェクトに取り組み、成果物にまとめ発表できるよう各回の講義内容の連携を図り、習得した知識をスキルとして活用する機会も設定できた。これは、協働学習の促進と学習成果の可視化にも役立ち、生徒は習得した知識等を本府高校生サミットや各校の探究活動に活かすことができた。なお、共同実施校の参加生徒が、関西学院大学高等部主催「中・高生による探究の集い 2022」コンテスト部門に出場し、第２位となった。
ウ　全プログラムを通して生徒はきわめて意欲的に参加し、日本語や英語でのレポート等について、取組状況が良好であった。また、参加者アンケートから生徒の将来構想にも大きな影響があったことを見取ることができた。

g-2.「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム（きょうとＡＰＰ）」
管理機関は、京都府立高等学校に在籍する生徒が大学の正規授業を履修するプログラムの実施に関して、京都府立大学及び福知山公立大学と覚書を交わし、令和５年度までの試行を開始した。試行期間中の身分は聴講生となるため、大学による単位認定は行わず、修了証の発行のみ行う。修了証を発行された者については、在籍校において学校外における学習に係る単位として認定する。令和４年度の開講科目等に係る詳細は以下のとおりである。なお、参加対象校は拠点校（鳥羽高校）と共同実施校（福知山高校）の２校であり、受講方法は原則、オンデマンド方式のオンライン受講としている。

＜令和４年度「きょうとＡＰＰ」＞

学期	大学	科目名	聴講者数	修了者数
前期	福知山公立大学	経営学入門	２名	２名
		多文化共生論	２名	２名
		エンタテインメント情報学	２名	２名
後期	京都府立大学	現代社会と法	６名	令和４年度末に確定
		コミュニティワーク	２名	

		森林の科学	２名	
	福知山公立大学	地域協働論	２名	
		ゲーム情報学	４名	

＜成果＞

ア　受講者アンケートによれば、生徒の主体的な姿勢に大きな変化があった。例えば、講義の視聴以外でも関連書籍などを読み、最終レポート作成に取り組んだ。

イ　大学教員によれば、能力や意欲について大学生との差は感じられないということであり、大学教員にとって大きな刺激となったようである。

ウ　大学の正規授業を修了した生徒は、大きな達成感を得て、自己肯定感が高まった。

＜課題＞

ア　大学生に対面で実施している授業を録画して配信する場合、大学教員の負担が大きい。

イ　大学にとって、先取り履修のメリットが明確でない。

h.　より高度な内容を学びたい高校生のための拠点校・共同実施校の条件整備

拠点校では「STEAM 数学」や「文化遺産論α・文化遺産論β」等の多様な学校設定科目を設置し、生徒の興味・関心に合わせて、より高度な内容を学べるカリキュラムを編成している。

拠点校、共同実施校及び一部の府内連携校について、希望生徒が府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」を受講できるように条件を整備した。また、拠点校及び共同実施校では、府内２公立大学による大学教育の先取り履修について、希望生徒が聴講できる条件が整っている。

i.　日本人高校生と留学生が一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制の整備

共同実施校が、アジア高校生架け橋プロジェクトにより、１名の留学生を受け入れ、日本語能力を考慮しながら、探究活動を含めた様々な取組を在校生と一緒に取り組めるように配慮した。

８　目標の進捗状況、成果、評価

a.　イノベーティブなグローバル人材の育成状況

育成を目指すイノベーティブなグローバル人材に求められる６つの資質・能力及び探究的な資質・能力等について指標を定め、アンケート調査を３年間実施した。その結果と拠点校担当者へのヒアリング調査から分析できる成果は、以下のとおりである。

a-1.　令和２年度入学生（現３年生）の拠点校生徒対象アンケートに係る３年間の経年比較

ア　成長志向について、令和４年 12 月の結果において、全ての指標で肯定的回答率が１年次よりも上昇している。２年次に肯定的回答率が下降したが、３年次に上昇したものは、以下の２つである。

・指標４「自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい。」
（１年次 90.3%　→　２年次 76.6%　→　３年次 95.5%）

・指標５「集団での問題解決場面において、率先してリーダー的な役割を担うことができる。」（１年次 47.8%　→　２年次　49.4%　→　３年次 58.6%）

イ　海外志向について、英語・異文化への関心及び海外志向性ともに、２年次に肯定的回答率は下降した。しかし、３年次 12 月の結果は１年次と同様の肯定的回答率となった。

ウ　６つの資質・能力について、いずれの指標も３年次では１年次を上回る肯定的回答率となっている。特に変化の大きい指標は以下の２つである。

・指標 12「身近な地域や京都の事柄を、日本全国や世界と関連付けて考えることができる。」【歴史をとおして世界を俯瞰する力】（１年次 41.8%→３年次 63.0%）

・指標 18「京都や世界の伝統・文化や技術について、それらの持つ新しい価値に気づくことができる。【新たな価値を創造する力】（１年次 56.0%→３年次 76.5%）

また、２年次に肯定的回答率が下降した「多様な文化的背景を持つ人々と協働する力」に係る指標 13 と指標 14 や「困難な状況を突破する力」に係る指標 21 において、今年度 12 月には１年次の結果を上回る肯定的回答率となっている。

・指標 13「異なる文化や価値観を尊重している。」
（１年次 86.6%　→　２年次 77.0%　→　３年次 93.7%）
・指標 14「異なる価値観を持つ人と協力しながら課題に取り組むことができる。」
（１年次 73.1%　→　２年次 70.9%%　→　３年次 88.8%）
・指標 21「困難な状況であってもあきらめたくないと思う。」
（１年次 78.7%　→　２年次 71.7%　→　３年次 88.8%）

a-2.　令和３年度入学生（現２年生）の拠点校生徒アンケートに係る２年間の経年比較

ア　成長志向と海外志向ともに、１年次の結果と比較して大きな変化はない。全体として、令和２年度入学生（現３年生）の２年次の結果よりも、肯定的回答率は高い。

イ　６つの資質・能力について、１年次より肯定的回答率が上昇しているものに、「科学的に思考・吟味する力」に係る指標 15（＋7.4）と「困難な状況を突破する力」に係る指標 21 と指標 22（＋9.6%、＋7.0%）がある。なお、肯定的回答率が下降している指標はない。

ウ　令和２年度入学生と比較して、６つの資質・能力について、「歴史をとおして世界を俯瞰する力」に係る指標 12 と「新たな価値を創造する力」に係る指標 18 は、他の指標と比べて肯定的回答率はそれほど高くなく、指標 12 が 43.6%、指標 18 が 67.8%となっている。これは令和２年度入学生と同様の傾向である。

a-3.　令和４年度入学生（現１年生）の拠点校生徒アンケートに係る年度内比較の結果

ア　成長志向及び海外志向に係る指標について、年度内の調査（７月・12 月）の比較では大きな変化はない。

イ　６つの資質・能力について、指標 13「異なる文化や価値観を尊重している。」は肯定的回答率が 92.4%と極めて高い。また、「困難な状況を突破する力」に係る指標 21 について、肯定的回答率が大きく上昇している（75.1%→87.3%）。

ウ　６つの資質・能力について、指標 12（47.5%）と指標 18（66.3%）の肯定的回答率は、令和２・３年度入学生と同様に他の指標よりも肯定的回答率はそれほど高くない。

a-4.　令和２年度入学生（現３年生）の探究的な資質・能力に係る生徒アンケート結果

ア　鳥羽高校

昨年度（２年次）に指標１と指標７の肯定的回答率が下降した。しかし今年度 12 月では、全ての指標で１年次の肯定的回答率を上回っている。特に変化の大きい指標は、指標５（＋35%）である。

・指標１「関心のあるテーマに、課題を発見・設定できた。」
（１年次 75.7%　→　２年次 72.1%　→　３年次 84.3%）
・指標５「研究内容を研究ノートやポスター等に効果的にまとめ、発表することができた。」（１年次 48.5%　→　２年次 63.2%　→　３年次 83.5%）
・指標７「自己の役割を自覚し、協働的かつ建設的にグループ活動に参加しようとしている。」（１年次 83.6%　→　２年次 73.2%　→　３年次 87.4%）

イ　福知山高校

２年次までに探究活動を終える教育課程となっており、令和４年 12 月の結果は参考程度の扱いとなる。ただし、鳥羽高校と同様に指標５の肯定的回答率は初年度（74.0%）から着実に上昇し、令和４年７月（３年次１学期）には 90.2%の生徒が肯定的に回答している。

a-5.　令和３年度入学生（現２年生）の探究的な資質・能力に係る生徒アンケート結果

ア　鳥羽高校

昨年度（１年次）と比較して、全ての指標で肯定的回答率が上昇している。特に、「情報の収集・選択」（＋15.4%）、「思考・分析」（＋17.0%）、「仮説構築」（＋15.2%）、「表現」（＋11.9%）、「社会参画の意識」（＋12.0%）に係る指標で顕著な変化がある。

イ　福知山高校

全ての指標で肯定的回答率が大きく上昇している。特に「仮説構築」については、１年次 35.2%に対して、今年度は 76.8%まで上昇した。

a-6.　令和４年度入学生（現１年生）の探究的な資質・能力に係る生徒アンケート結果

ア　鳥羽高校の年度内比較において、「表現」（＋18%）と「主体性・積極性」（＋9.8%）で、肯定的回答率の顕著な上昇が見られる。一方、ＳＤＧｓへの意識に係る指標８で肯定的回答率が下降（△6.0%）している。

イ　福知山高校の年度内比較において、「課題設定」（＋15.9%）、「仮説構築」（＋16.5%）、「主体性・積極性」（＋15%）、「多様性・協働性」（＋11.3%）で肯定的回答率が上昇している。

a-7.　ＷＷＬ事業に係る３年間の成果

ア　拠点校における３年間を通した探究活動のサイクル確立

拠点校の探究活動は、学年が上がるにつれてローカルからグローバルな視点での探究へと発展させ、３年次でその成果を英語又は日本語でアウトプットする流れを確立している。これにより、３年間かけて６つの資質・能力を着実に伸ばすことに成功している。特に「歴史を通して世界を俯瞰する力」や「新たな価値を創造する力」について、１年次よりも肯定的回答率が 20%も伸びており、段階を追った指導の結果である。

また、探究活動について、３年次に再び時間をかけて成果をまとめ発表すること、また他者と意見交流することで、自分自身の成長に改めて気づくことができているようである。それが「議論の際は自分の考えを相手にわかりやすく伝えるとともに、相手の意見にも耳を傾けることができる力」の育成に繋がっている。

イ　探究活動を軸にした教員の授業改善と教員の意識変容

令和２年度入学生において、２年次（令和３年度）に肯定的回答率が下降した指標が６つの資質・能力及び探究的な資質・能力に係る指標で見られたが、令和３年度入学生ではその傾向は見られない。これは探究のテーマ設定方法について工夫と改善をした結果であり、教科指導においても探究的視点から発問できる教員が増えたことが要因であると考えられる。探究活動を軸にした取組が、教員の教科指導にも良い影響を及ぼしている。

また新たな教科・科目の研究開発についても、６つの資質・能力をどのようなアプローチで育成するのかについて、校内で実践報告書を作成し共有することで、教員間で指導に関する意識が統一され、授業改善が進んだ。

ウ　拠点校・共同実施校の探究的な資質・能力の育成

拠点校と共同実施校ともに、「総合的な探究の時間」を通して、探究的な資質・能力を着実に育成できている。特に、両校ともに、「研究内容を研究ノートやポスター等にまとめ、発表することができた。」の肯定的回答率の伸び率は非常に高い。その他の指標と比較して、１年次における発表に係る指標の肯定的回答率は低い傾向にあるが、学年が上がるごとに着実に上昇していることから、両校の指導の成果が表れている。

b.　ＡＬネットワークが果たした役割

ア　拠点校における高大社連携による取組の充実

高校生が京都の事柄を世界と関連させて考えることや、京都の事柄について新たな価値に気づくために、拠点校では事業協働機関である株式会社松栄堂や株式会社岡墨光堂等と連携しながら、京都の伝統文化に係る学習を推進している。また探究活動において、グローバル科では事業協働機関の複数の大学教員と、普通科では京都府立大学の教員と連携し、講義や中間発表会における指導・助言をお願いしている。３年次の留学生との交流会も含めて、大学教員や企業の方など、多様な文化的背景を持つ人々と協働しながら意見交流する機会を３年間にわたって生徒に提供したことで、「自分の考えをわかりやすく伝え、相手の意見にも耳を傾けること」や「異なる価値観を持つ人と協力しながら課題に取り組むことができる」の育成にも効果が表れている。

イ　高度な学びの機会による生徒の変化

事業協働機関等と協働して実施している、府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」や「きょうとＡＰＰ」のような高度で先進的な学びは、参加生徒のキャリア発達に大きな影響を与えている。イノベーティブでグローバルな人材に求められる資質・能力の育成にとって非常に効果的な取組ではあり、高校生が将来について深く考える契機となっている。また、自己研鑽に必要な向上心や挑戦心の育成にとっても大変意義がある。

ウ　学校・地域を超えたグローバルな協働学習の機会の提供

京都府WWＬ高校生サミットにより、拠点校をはじめ、府内連携校の生徒が他県の高校生、そして海外の高校生と社会課題について議論する場を提供できた。地理的・時間的制約を超えて、学校・地域・国の枠を超えて、高校生が議論することで新たな課題を発見し、またこれからの社会で活躍するグローバル人材のネットワーク形成に貢献できたと考える。これは、ＡＬネットワーク形成により達成できた大きな成果である。

c.　短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況

c-1. 短期的・中期的目標（令和２年度～令和５年度末）について全ての目標を達成した。

ア　府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」により、拠点校及び共同実施校が大学教育の先取り履修に向けた実証研究を行い、高等学校の単位として認定を開始した。

イ　情報共有の場として京都府WWＬプラットフォームの本格運用を開始した。

ウ　京都府WWＬ高校生サミットを開催した。

エ　高校生が大学の正規授業を履修する取組については、令和４年度から２年間の試行を開始した。大学による単位認定については継続して協議を行う。

c-2. 長期的目標

ア　ＩＣＴを用いた時間的、地理的、経済的に制約されずに活用できるＡＬネットワークのモデルとして、事業終了後も京都府WWＬ高校生サミット及び「スマートＡＰ」の継続開催を決定した。

イ　事業終了後の継続的な運営に向けて、次年度の財源等の確保ができている。

９　自走に向けた方向性と、次年度以降の課題及び改善点

a.　事業協働機関と連携し、自走に向けた方向性について、次年度も以下の取組を計画している。

ア　府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」の実施

イ　「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」の試行継続

ウ　京都府WWＬ高校生サミットの開催

エ　総合地球環境学研究所と連携した「高校生のための気候変動学習会」への参加

b.　本事業に関する管理機関の課題や改善点について

事業終了後の、ＡＬネットワーク京都の運営体制について、人的・予算的措置がないなかで、円滑に取組を実施するため、運営面のさらなる工夫と業務の整理が必要となる。

c.　ＡＬネットワークの課題や改善点について

ア　コロナ禍のために、連携が進まなかった関係校等との今後の連携を計画する必要がある。

イ　「スマートＡＰ」対象校を拡大し、より多くの連携校に高度な学びを提供できるかについて検討する必要がある。

ウ　「きょうとＡＰＰ（大学教育の先取り履修）について、大学の単位認定と対象校拡大について、事業協働大学と本格的に協議を始める必要がある。

d. 研究開発にかかる課題や改善点について

ア　高大社連携の取組を事業終了後も円滑に実施するために校内体制の維持が課題となる。特に働き方改革に伴い土曜日授業がなくなり、大学教員等との日程調整が課題である。

イ　「総合的な探究の時間」等に係る成果を連携校等にさらに普及させていく必要がある。

【担当者】

担当課	指導部高校教育課	ＴＥＬ	075-414-5815
氏　名	伊藤　恵哉	ＦＡＸ	075-414-5847
職　名	指導主事	E-mail	k-ito07@pref.kyoto.lg.jp